

| | |
|------------------|---|
| Title | バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』(巻四)解題・翻刻 |
| Sub Title | |
| Author | 辻, 英子(Tsuji, Eiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 2009 |
| Jtitle | 三田國文 No.50 (2009. 12) ,p.54- 74 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.20091200-0054 |
| Abstract | |
| Notes | 図削除 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20091200-0054 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』（巻四） 解題・翻刻

辻 英子

本稿は「三田国文」第四十九号に掲載した（巻三）を承ける
翻刻である。

源氏目録之四

- 二十 わかな上下
廿二 よこ笛よこふえ
廿三 夕きり
廿五 まほろし
廿七 にほふ宮かほる中務とも
- 廿一 かしは木よこふえのならひ
廿四 みのり
廿六 雲かくれ

（遊び紙）（1オ）

二十 若菜上わか菜

是を若菜の巻と云事は玉かつらの内侍のかみはひけくろの大将の北方まきのかたにていつしかわかきみ二ところまうけ給へ

り正月廿三日にねの日源氏のあんの御かたへねのひのいはひにまいり給ふ御ゆうふかくさまくにてめてたかりし玉かつらの哥

わかさはさす野への小松をひきつれて
もとのいはねをいのるけふかな73（2オ）
とよみ給へり六条の院の御うた

小松はらすゑのよはひにひかれてや
野へのわかかなもとしをつむへき74

とよみかはし給へり此心は源氏の御賀の心ねにかくいはひ給へり上らうは賀とて四十の年より十にみつるとし毎にいみしき大ほゑおごをこなひはいかをとゝ

のへ一門一家の一大事にいのりをする事なりこれにより内侍まかてらの事のかみ御子にした

まふゆへなればねの日によそへておはしたる子の日とは正月のはつねの日は日とて野へのあそひわかかなそなふる事

（2ウ）

ありこれにも若菜のあつものあり心え
へしさて程へて内侍のかみおはしたて
まつり給へはいとねひまさりて物々し
く見るかひ有しを源氏のほめ給ひし
なりわかかなに見るかひありといふ事
くるしからす玉かつらにあるへし源氏
の御とし四十なればよそちの春など云
事有へし御賀といふ事は人のいのちを(3オ)
のふる事にてしうけんなり扱藤のう
らはにあかしの中宮とうくうへ参り
給ひてめてたかりし事なり又中宮
わかみやうませ給ふ事ありこれをあかし
のうらにとまりし入道きゝつたへていか
はかりかうれしかりけん此よのねかひも
いまみちぬるとふかき山にこもりてみや
このむすめのもとへも北のかたのうはき
みのもとへもこまゝと文かきてのほ
す此人くゝのいのりをすみよしにて(3ウ)
たてをきたる願書とも文はこに入て
ふうしてのほせたてまつるこれを源氏
御らんしてこそすみよし参りといふ
事は侍れ此あかしのうへをまうけん
とてみたりし夢をもかきたり入道の
うたに

ひかりいてんあかつき近くなりけり

今そ見しよの夢かたりする75

と夢ものかたりの文かきそへたれはいかにも
此心には夢かたりあかしのいはやなど云(4オ)
事あるへし其比女三のみやと聞えし
は朱雀院のひめ宮にておはしますあ
またの御中に院の上かきりなくいと
おしみおほしめして六條院に此宮を
あつけたてまつり給ふ六てうのみん御
年四十の二月なりこれそ此巻の下に
かしは木のゑもんのかみに名たちてかほ
る大将をうみ給ひし人なりいつより源
氏はかよひけるそととふ事あらはわかな
の上よき日をえらひ六てうの院へうつら(4ウ)
せ給ひ新殿しつらひて大臣の御うへにさ
たまり

すませ給ふに

御とし十五にて

むかへられ

給ひし

心えへし(5オ)

〔絵一〕(5ウ)

若菜下

是は上にわかなのいはれあれはおなし事也

此巻には源氏すみよしに参り給ふ上に

中宮春宮のわかみやまうけ給ふといひ

つる宮五にてとうくうにつかせ給ふ御

ちの春宮は朱雀院の御子にておはし

きなに事もすみよしの神のめくみ

の有かたくおほえてむらさきの上あかし

の上はのあまうへ女御の宮などおほし

めすまゝにひきつれ給ひ参り給ひし(6才)

なり比は十月廿日の日その程のことにはに

しろくかれたるおきにたかやにかさして

たゝひとりまひて入ぬるまつはらにはる

くゝとたてつゝけたる御車はみな神

祇すみよしにてむかしの播磨明石なに

はのかたさまをみやりて心しるとおもひ

出しつる心をつくへし扱も此女三の宮

をかしは木のゑもんのかみ見たてまつ

りておもひかけたる事は上の巻に六

條院にてかすめるくれはるの折ふしおもし(6ウ)

ろきに此御かたの庭にて御まりありゑ

もんのかみも参り給ふにみやのかはせ給ふ

ねこいつくよりかしらぬねこをひてらう

かはしくみすのうちへいりてさはけ

は人々おひへさはく宮も立ち給へりね

このつなにてみすあかりて御すかた

見え給ふその折よりやまひとなり

あさましかりし事なりつるに此

宮ゆへそかし身をいたつらになした

まふそのほどのことは(7才)

春のゆふくれ　　まり　ねこのつな引

たちすかた　　もやのはしら

なといふ事有へしさてゑもんのかみ此宮の

めのとに小侍従といひし女房はさるたよ

りなれはかたらひて文をやるそのことは

みかきかはらを分かて風にあたり

てそれよりも心わひしくなとかき

てやる小侍従おもひよらぬ心ちして

あなはアハけらしなどはかりかきて返事

をやりしなりはしりかきとはなを(7ウ)

さりにて心にもいらぬ事をいふなり

かくて小侍従せめられこうしてつあに

あはせ給ふ此は四月そかしそのころむら

さきの上なやみ給ひていと大事にお

はしければ院もひたすらに打たえて

此御かたにおはしませはよきひまつく

りてあはせそめしなりやかてほどな

くはらみ給ふこれをけんしの御子と号

すたゝならすなやませ給へはむらさき

の上の御ことにさしあひ又いかならむと(8才)

心くるしくおもひ給ひて源氏おはしま

したれば宮はさまく空おそろしくか
なしくあひ給ひしなりゑもんのかみを
夢に見たるよしをかたり給へはされは
こそとおほしめして御目をも見あ

はせられすおはしませは此ほとのと
たえをうらみ給ふにやとおもひなくさ
め給ふほとにいとあつきころなれば夕
風たちてむらさきの上の御かたへ帰り
給ひなんとし給へは女三の御なこりおし(8ウ)
くやおほしけん御とめ有しことはの
ほんか

夕やみはみちたとくし月まちて
かへれわかせこそそのまにもみん76
月まちてともいふなる物との給へは其
まにもやとおほしめすをいとおしく
おほしてその夜はとまり給へはさらん
には此事あらはれさらましといと
かなしくて朝すゝみの程にかへりた
まふにけんしあふきをおとさせたまひ
てもとめさせ給ふに御しとねの下にあ
さみとりのうすやうにかきたる文を
をしまきたるはし見ゆるあやし

くおもひ給て御かゝみなど御らん
する所にて御らんすれはこまくとか
きたるにまかふへくもあらずかの中

納言の手にてたまさかにあひたてま
つり心のまゝならぬこひのくるしさな
とかきたるなりけんしの御心のうち
いかばかりか有けん小侍従御かゝみなど
もちてまいりて見たてまつればきのふ
かのかたより参りたりし文の色のかみ
を御らんするよとなにとなくむね打
さはきひしくとする心ちしてけり

やかて源氏かへり給ひて後に宮にとひ
たてまつればいさと云しほとに院入
せ給ひしかはしとねのしたにをきた
りしとの給ふによりてみるになに
かあらん小侍従かくと申せは宮はたゝな
みたならてはかこつかたもなしその程(10オ)
のことはみとりのうすやうの文しとね
のしたあらはるゝなどいふ事を付へし
それよりそけんしは人めはかりにてつ
ゐに其後はあひ給はす人しれぬ御心のう
ちさこそとあはれにもあさましき
なりさてわかかなの女楽といふ事これは
女三の宮いまたゑもんのかみにあはさりし
さきなり朱雀院の五十の御賀を御子た
ちつとめたてまつり給ふ此女三のみや
つとめてまいり給ふけんしのもとに(10ウ)
おはしませはさりともしきをならし

給ふらんと御うしろ事のありしよし聞
給ひてもとよりえさせ給へは御まへにて
聞ところあるほとにとり立てよる

ひるならはせてまつり給ふいとさと
く心えてならひと給ふそかし君はか
りつたへたる人もなしとほめ給ふそかし
うち／＼に心みんとて正月廿日はかり
なれは春の夜のとかにかすむ夜御かた
／＼をよひたてまつりて御樂ありこ (11オ)

れを女かくといふ也夕きりの大将みす
のとなて御ことはかりとゝのへて参り
給ふ女三の宮のきんの御琴むらさきの上
はわこん女御はさうの御ことあかしの上へ
はひは源氏はしやうかしたまふふえは夕
きりの御子ひけくろの大将の御玉かつら
の御はらの子これいとおさなくてさう
の笛ふき給ふさていつれもおもしろく
ありしなり其時の御すかたふりはな
にたとふれはまつ女三の宮の御かたちは (11ウ)

二月中の十日はかりの青柳のはつ
かにしたりはしめてうくひすのは風に
もみたれぬへし御くしはひたりみきより
こほれかゝりて柳のいと春雨にみ
たれたる風情なり女御のきみの御すかた
はこたかき峯よりあたりにならふ花な

くさきこほれたる藤の心ちしてよし
ありて見え給ふむらさきの上は大きさ
なとよき程にてやうたいあらまほしく
あたりにもほひみちて花といはゝさ (12オ)

くら梅にたとへてもなを物ことにすく
れたりけにゆふなる御さまなりかゝる
中に明石の上はけおとさるへけれとも
あらまほしくもつけてさ月の花

たちはなもみもくしてをしおり
たる心ちするこまの青地のにしき
のはしさしたるしとねにみつから
おはずひわをうちをきてたはやかに
つかひなしたるはちをときより

みるはなをまさりたりこれらをことに (12ウ)
よりてよそへつくへし又此巻におち
はのみやと云事有これはゑもんのかみ
わか北のかたにもちたてまつる此女三
の宮のあねそかし御はゝはそのすち
もなき下らうのかういなり朱雀院

のにし山に御くしおろしてうつろは
せ給ひしより女三の宮をは源氏給はり
給ふゑもんのかみも宮たちをちゝおとゝ
のそみ給ひしかは此女三の宮を給はり
給へはさておもひみたれてよりなかも
て女三の宮にさもおとり給へるそかし (13オ)

とおもひてよみ給ふ哥

もろかつらおちはをなにゝひろひけん

なはむつまじきかさしなれとも77

とよみしより此宮をおちはの宮と

申すかたかたちこともなくしめやかに

はせし人なり小野にすみ給ひしより

小野のおちはの宮といふ事も

あり心得へし(13ウ)

(絵二)(14才)

井一 柏木かしわぎ

此巻かしは木といふ事月卿げけい雲客うんかくを月日つきひ

星雲ほしぐもかすみまつよろつの木草きくさになそ

らふるにゑもんのかみをかしは木によそへ

たれはさてかしは木と云なり哥にも

此人をはかしは木とよみたり扱此人女三

の宮の事ゆへにやまひかきりになりて

いまはのおり大納言になさる此人しゝたる

事はこひといひけんしすこし其心をほ

のめかして酒をしみて御心よらぬ御め

つかひをし給ひしより心のおにゝやい

とゝしく心かきみたれしなり扱かきり

のおりかの侍従をよひて宮へ哥をた

てまつる

いまはとてもえんけふりもむすほゝれ

たえぬおもひのなをやのこらん78

女三の宮

たちそひてきえやしなましうきことを

おもひみたるゝけふりくらへに79

とありしをこそ女三の宮のけふりくらへ

とは申けれかしは木にたよりあることは

かのやまひのうちに女三の宮かほる大

将をうみ給ひしなり源氏は我子ならね

とも人のおもはん事をおほしてもて

なし給ふつるにそのまゝよるなどと

まり給ふ事もおはしませす宮の御心

のうちそいとおしき御身のうさを

なけきしつみ給ふ程に御心もれいのさ

まにもおはしませすこれも御物のけ

のゆへ有てさてもかきりとおほして

かゝるつゐてにとさしもはかなくよ

はき御心にも御身のうきをおほし

めしとりて御父ゑんの上へ申給ひて

御くしおろさせ給ひしなりこれをか

の大納言聞いていとゝやまひおもりてし

に給ひけりかきりのおり夕きりの大将

はかの大納言のいもうとむこそかし雲

ゐのかりはいもうとなりいとなかよき

事なればよひよせてさまゝにいひ

(15ウ)

をきかのわかきみの御事もかたはし
いひをきておやにもさきたちてうせに
けりさて女三の宮は心ちすこしよく
なり給ふかのわか君はいつくしくおはし
ませは源氏いとあはれにおほしてかしつ
き給ふ五十いそかのいはひのおりかの若君
を源氏かきいたきて女三の宮の御そはへ
人のなきひまにさしよりて

たかよにかたねはまきしと人とは
いかゝいはねの松はこたへん80
とよみ給ひしかは宮いふかたもなくはつ
かしくおほしてひれふし給へりさこそ
はつかしくも心うくもおほしけんゑ
もんのかみのうせし事は春の比なり
父おとゝなげき給ひし哥に

木のしたのしづくにぬれてさかさまに
かすみのころもきたる春かな81
とよみ給ひしなりこれらを取あはせて
付へしへけふりくらへ いはねの松
たかよにまきし種 いそかの いはひ
もゆるおもひ (17才)

みなくこひの
ことは心え
させ

たまふ

へ

し (17ウ)

〔繪三〕 (18才)

廿二 横笛よこふエ

此巻よこふえと云事かのゑもんのかみの
北のかたおちはのみやを是一条のみやと
も申ゑもん死し給ひて後あはれとお
もひし中のかたみなれば夕きりの大将
か的一条のみやへあはれにかすかなるとふ
らひにしはくまいり給ふほとにした心
ちなきにもあらず八月なかはの月こと
におもしろくあはれなりしにあこか
れ出て大将此みやへまいり給ひたれば御
はゝのみやす所わこんをひかせ給ふ宮は
御ことあそはしてななめ給ふ折ふし大
将まいり給ひてみなみのみすの前のす
のこにおはします内よりふえをとり
出して大将にすゝめ給ふ此笛こそ古ゑ
もんのかみのそのきはまてもち給ひて
まことにつたへたてまつらんよしをの
給ひしなとおもひ出るほどふきすさひ
たまふさうふれんふき給ひてみすの内を
わりなくすゝめ給へは思ひをよひかほなる

(19才)

かくもかたはらいたけれともおちはの宮

露しけきむくらのやとにいにしへの

秋にかはらぬむしのこゑかな 82

ゆふきり

よこ笛のしらへはことにかはらぬを

むなしくなりしねこそつきせね 83

といふ哥のゆへなりさて此笛をはやかて

をくり物とて大将の御かたへたてまつ

りたまふこれなんやうせいあんの御笛

といひたり大将わか御所三条殿にかへ (19ウ)

りたまひてすこしまとろみ給ひし夢

にゑもんのかみありしなからのすかたにて

此笛はおもふかたことに侍りといひて哥

夢の中ゑもんのかみ

ふえ竹にふきよる風のことならば

すゑのよななきねにつたへなん 84

とよむと御らんしければかの笛をすゑの

よにかほる大将につたへよとなりつゝあに

つたへ給ふそかしさてこそかほる大将を

はよこふえの大将ともいひけれそのことは

(20オ)

にふきつたふる笛おちはゆふきり扱も

此巻にかほる子になり給ふかしは木一

めくりの仏事にもおやたちかきりな

くなげき弔ひ給ふ六条院にはさまく

におほしめし出る事さへあればあはれ

におほしてかの若君の御かたよりと

心さして金を百両御心さしことさら

に御ことはともいろくゝにそへつかはされ

ければ人は此心をしらねはおやたちをは

しめて哀にかたしけなさの御心さ (20ウ)

しと御なけきの色に見えけりと

又はうれしくおもひの外によるこひ

給ふそかし金なといふ事あらは人こそし

らねなと云事つくへし此巻にた

かんなどいふ事有朱雀院の御かたより

たけのこを女三の宮へまいらせ給ふ此宮

御くしおろして後は入道の宮と申此入

道のみやへまいらせられしなり此若君

とりもてあそひし所もあひたりしか

はたけのこと云心なと有へし (21オ)

(絵四) (21ウ)

鈴虫すずむし よこ笛のならひ

此巻すゝむしと云事は八月十五夜の月の

おもしろくすみわたりにかきりなくあは

れなれば六条院はうそふきなめ給ひて

入道のみやのかたへおはしまして月御覽

するに御まへのせんさいにはなたれた

るむしともの中にすゝむしの花や
かになきければ入道の宮

おほかたの秋をはうしとしりにしを
ふりすてかたきすゝむしのこゑ 85 (22才)
けんし

こゝろもて草のやとりをいとへとも
なをすゝむしのこゑそふりせぬ 86
とよみ給ひし哥の故なり月くまなく
ふりすてかたきすゝむしのこゑなど
いふ事

有へ
し (22ウ)

〔絵五〕 (23才)

二十三 夕霧 ゆふぎり
此巻夕きりと云事大将の小野にてよ
み給ひし

山さとのあはれをそふる夕きりに
たち出んそらもなき心地して 87
とありしゆへなり此巻ゆへにこそ大将を
は夕きりの大将ともいひけれ大将の小野

のかよひちは此一条のおちはの宮にふ
かく心をかけ給ふ程にそのころ母宮す所
一条の宮にてわこんひきし人ものゝけ (23ウ)
にわつらひ給ひていたく山さとにかやう
のおりの用にやこしらへ給へる所へうつる
はせ給ふ大将いとかなくおはしたり
御馬にて出給ふみちすから秋ふかき小野
の山のけしきすこくあはれなるにおはし
付きてまつかの御心ちをとふらひ給ひて
後宮の御かたのみすのまへのすのこにお
はしてみすひきかつき少将と云女房
よひ出してなにやかの事とものた
まふに程なく日もくれてきりふかく立 (24才)
こめまかきのしかもむしのねもなみたも
よほすたより取あつめかへらんかたも
なき心ちしてうちかたらひて此哥を
よみて其夜はとまり給ふそのほとこの
とは

夕きり 秋ふかき野山

此山かきのしか むしのこゑ

たきのをと おちは

などゝいふ事を小野とあらはつくへし
さるほどにあかつきかへり給ふをのへの文あ (24ウ)
り返事は宮いとゝ物うくはつかしくお
ほしめしてかき給はすいかゝせんとて宮

す所くるしき心ちをしみてかき給其
返事を大しやう御らんする所を北の御

かた御らんし付給ひてうしろより此ふみを
とり給ひてかゝる時のまきれに其夜は小野

へおはしまさゝりしを母宮す所かろ

くしき御なはさても有ぬへしとうす

きかたにやおもひなされていとゝ心ちも

くるしくよはりはてゝつゐにかくれ (25才)

給ふいとつみふかゝりし宮の御ためなり

扱も四十九日もほとなくすくるまゝに

京へむかへ奉りて三条の上と十五日つゝ

かよひ給ひしなり又此巻につりはみ

もと云事有これ人のいたしたらはお

ちはの宮のつかひし少將の君といひし

女房はさきの宮す所のゆかりなればかく

れ給ひし後うすくろそめのしみたる

もきぬをきて几帳きぢやうひきよせて大將

のとふらひにおはしたりしに對面せし (26ウ)

事なり又此巻にしのひし事なればむま

にておはし給ひしくるすのなとへむま

の御ともなとゆきてとまりあかつき御

むかへたまへられよとのたまふされは小野に

くるすのむまうつしをけなと云事有

へし是は秋の比なり又みまやにありし

とき御むまにうつしをかせ給ひてとれう

ほんに有事なり小野へいうまで人を
つかはし給ふ時の事なりくらの事

(繪六) (26ウ)

見えす (26才)

二十四 御法

此巻みのりと云事むらさきの上なやみ

大事にて年ころ千部のほけきやうの

くやういかめしき大ほうゑありたきゝ

のきやうたうなとありていとたつとし

心ほそくおほしめして御こなとおは

しまさす有ければかくなとおはしま

すほけきやうのほうゑはやよひ十四日也

御ほうしはてゝをのくゝ帰り給ひなんと

するに花ちるさとの御かたへ (27才)

むらさきの上

たえぬへきみのりなからそたのまるゝ

よゝにとむすふなかのちきりを88

花ちるさと

むすひをくちきりはたえし大かたの

のこりすくなきみのりなりとも89

とありし哥の心なり此よははかなかりし

事何のこともさかしくこそその給ひをかぬ

にやうく御心あてにもしをかせ給ふもい

とあはれにそさふらふかきりの女房とも (27ウ)

又かた／＼もあはれに有かたき御心の
ほとおほかるへし此三の宮とひめ君を

そ朝夕そたて奉り給へは見奉らん程

の事あはれにて六になり給ふ三の宮を

御まへにすへ奉りて我はかなく成たらん

時は此たいにすみ給ひて此紅梅こうばいとき

くらはかたみにとりをき見たまへと

の給へはおさなき御心にてもいたくふしめ

に成給ひて御袖をまさくりて立給ひぬ

あかしの中宮の御はらの姫君をもむら

きの上のやしなひにて六条院のはるの

かたむらさきの上のたから物ゆつりえて

あかしの一品の宮と申てすませ給ふ扱

こそすゑまでもにほふ兵部卿の宮は此た

いにすみ給ひしなりかくてむげに頼

もしけなく成給へは中宮いて給ふ此中宮

にそよろつの事を申をき給ぬすこし

おきあかり中宮に對面し給へは院御

らんしてけふはいとよくおきゐたまふ

めれは此御まへにてはこよなくはれく (28ウ)

しけなめりと聞え給ふむらさきの上

をくとみるほとそはかなきともすれば

風にみたるゝはきのうは露90
とよみ給ひしなりかくて日をへてお

もりて八月中程にかくれ給ふ院の御方

御心のうちおもひやるへしもしやとまも

り給へともかきりのさまはしるかりければ

御くしおろさんとて其作法などあるに

ふりわけかみのむかしよりてなれ給ひて

いまはとそきおろしけん明くれの御心ま

よひ夢まほろしともわきまへ給はず日こ

ろなれつかうまつりし人々さへにおもひわく

かたもなし物おほえたる物のなげかぬは一

人もなし中／＼院は御心つよくもてなし

給ひて大将おきりの君にの給ひあはせてことゝ

もをこなはせたまふ此大将むかしの野

分のあした風のまきれにのそきて見

奉りし御あさかほいかならんよにおほけ

なくおもふまてはなかりしかとも忘れかた

くおもひ奉りて今ならてはと思ひて (29ウ)

なに心なくうちふし給へる御かほをつく

く／＼とまもり給ふにいとゝひかりさし

そふ心ちしてむなしき御からに我た

ましゐ入心ちしてはかなかりし也はか

なくはいになし奉りて七日／＼の御仏

事のこりなく秋ふかく風はたさむく

吹しをりたる夕くれに父のおとゝより

御子の蔵人の少將して奉り給ふ
いにしへの秋さへいまの心ちして

ぬれにし袖に露そをきそふ91 (30オ)

とあり此心むかし大将の御はゝあふひのう
へのかくれ給ひしも此ころの事なりおほし
めし出てよみ給ひしなり

露けさはむかし いまともおもほえず

おほかた秋の夜こそつらけれ92

と返し給へり此御なけきよりみすの
とへも出たまはすたゝおほしめしほれ

たる人に見えはをこかましかりなん事

をおほしめして是や甘泉殿かんせんてんをいてや

らすへうはうとして夢ににたる心ねそ

かし雲かくれ此御なけきのゆへそかし (30ウ)

秋のすゑつかたとよ秋このむ中宮の

御つかひあり六条の宮す所の御むすめ

秋このむ中宮

かれはつる野へをうしとやなき人の

秋にこゝろをとゝめさりけん93

此むらさきの上は春の明ほのにめてた

まひし心にかくよみ奉り給ふいと心有

てそおほえへしけんし

のほりにし雲井なからもかへり見よ

われあきはてぬつねならぬよに94 (31オ)

御のりにはたゝいつくまでも年をへし

わかれのかなしき心をすへし此巻中

くくことはもなし

いつくも

わかれの

しき

なり

(31ウ)

〔絵七〕 (32オ)

二十五

幻まぼろし

二十五

此巻まほろしと云事源氏此御おもひに

なけきしつみ給ひてそらを打なかめ給ひて

おほそらをかよふまほろし夢にたに

見えこぬ玉のゆくゑたつねよ95

とよみ給ひし故なりかくれ給ひて又の

年のはるのひかりを見給ふにも春に

心をしめ給ひし事をおほしめし出てあ

はれなるに三の宮のかのかたみの紅梅に

うくひすのなきけるもしらすかほにて (32ウ)

となかめ給ふ

うへて見し花のあるしもなきやとに

しらすかほにてきあるうくひす96

大かたの春にほのめかされてにや梅の花

さきみたれてちるさくらあればさく

さくらありと山見わたされていかゝあ

はれの浅からん藤山ふきなどの心ちよ
けに咲みたれたるもうちつけに露け
くのみなれ給ふ心えらひしてうへをき
しにあればぬとあはれにて (33オ)

いまはとてあらしやはてんなき人の
こゝろとゝめし春のかきねを97

ほたる兵部卿の宮まいりて紅梅の下にうそ
ふき給ふにけんし

我やとは花もてはやす人もなし

なにゝか春のたつねきつらん98
宮うちなみたくみて 兵部卿の宮也

かをとめてきつるかひなく大かたの
花のたよといひやなすへき99

あはれなりし御心なりまほろしの春はかた
みの紅梅こうばい桜などいふ事あるへしき (33ウ)

みたれになりていとゝはれまなき
御心なり大将の君まいりたまひて御

物かたり申給ひしにまたれつるほとゝき
すのうちなくにも

なき人をしのふるよひのむらさめに

ぬれてやきつる山ほとゝきす100

又賀茂のまつりにいにしへのみあれおほし
出てさひしければ中将の君といふ女房

むらさきの上の心ことおほしめしたりし
人なり源氏のひくおもひ給ひしかと (34オ)

もおさなきよりおほしたて給ひし

かはことのほかにおちたてまつりてう
ちとけ給はず御かたみとあはれにて此

人はかりは御らんしはなたれすとやお

ほしけんまつりの日うたゝねしたる所へ

おはしましたりおきあかりたるにかた

はらなるあふひを御らんしていかにとや

此なこそわすれにけれとの給へは中将の

君

さもこそはよるへの水に見くさあめ

けふのかさしよ名さへわするゝ101

と申されたりしやさしかりし事也

日くらしのこゑきゝ給ふにも源氏

つれくゝとわかなきくらす夏の日を

かことかましましむしのことかな102

とうらみ給ふほたるのとひかふにも夕殿に

ほたるとふとめつらしからぬふる事さへお

ほし出されて時そともなくうらみ給ふ

七月七日には御あそひもなしほしあひ (35オ)

みる人もなしえたをかはせし御ちきり

をおほしめしいてゝ前裁まへざいの露いとしけく

わたりとのゝとよりとをりて見たたされ

るれは出給ひて源氏

たなはたのあふせは雲のよそに見て

わかれの庭に露そをきそふ

とうらやまれ給ふかくて八月十四日に御一めぐりなれば上下いもゐしてこくらくのまんだらをかきをかせられたりし

を供養したてまつり給ふ中将の君 (35ウ)

君こふるなみたはきはもなき物を

けふをはなにのほてといふらん 104

と中将の君のあふきにかきたりしを

御らんしける御心の中さこそおはしけ

め九月九日にはわたおほひたる菊を御覽

してもひとりたもにかゝる秋かなとか

なしひ給ふ神無月には大かたの空も

はれまなくあはれもふかくてふりにしか

とうちなかめて幻と云哥をよみ給ひし

なり十一月豊のあかりには人しれすむか

しの御事おほしめし出てひかけもし

らすとこひ給ふ御ほいとけ給はんもちか

き御心に御まへに人二三人さふらはせ給

ひて御反古ともやきすて給ふにかのす

まの迷の折所々よりたてまつり給

ひける中にかの御手なるはことにゆ

ひあはせてそありけるたゝ今のやう

なる御すみ付なとけにあとは千とせの

かたみなりと此世なからの御わかれを

たにもなけき給ひけんよとをしあ (36ウ)
て給へるにおつるなみたをまきら

かし給ひて

しての山こえにし人をしたふとて

あとを見つゝも猶まとふかな 105

いかならむ道までもとやおほしめしけん

まきあつめひきゆひてかき付給へるけん

しこまかにかき給へるかたはらにと

他本に有かやうにかき付てみなやか

せ給ふと見えたり

かきつめてみるもかひなしもしほ草 (37才)

おなし雲井のけふりとをなれ 106

とよみ給ひし御心の中おほひやるにも

せんかたもなかりしさむき夜のひとり

ねのいとゝねられぬ人ことにさこそは御さ

有らんとみな人々おほひまいりてきて

御てうすめして御をこなひしたまふ

に雪いみしくふりてさむきもわり

なきにうつみ火おこして御火をゝき

たてまつる古よりの御事ともおほひ

出る中にも入道の宮へわたりそめ給 (37ウ)

ひしはしめ心はしも色にいたし給は

さりしかともあちきなのわさやとこ

とにふれておほしたりそかし様々の

忘れかたき中にも雪ふりたりし

あかつきたちやすらひしに身さへし
みこほりたりしになきぬらしたる

袖をひき返し給ひしおもかけいかならん
世にか又みんとしつのをたまきにはあ
らねともむかしを今にとくり返し

給ふ御袖のうへに玉ちるはかりにふり
おちし御なみたを御まへにさふらひし
(38オ)

人々の袖も心せかるゝはかりにや扱も
しはすふつみやうなりことしはかりと
おほしけるにやたうしにさかつき給り
て御いはひありけふそ御かたちいとゝ
ひかるやうなりしそかしたうしさ
かつきのつゐてにかゝる事有き

春までのいのちもしらす雪のうちに

いろつく梅をけふかさしてん107

とよみ給ひしにそ雲かくれの御心なり
(38ウ)

ける正月のひきて物上達部などの物
まで調をかせ給ひてけり源氏

物おもふとすくる月日もしらぬ世に

としもわか身もけふやつきぬる108

御法みのりほうし幻二巻はいつれもおもしろけれとも
取わきたる

ことな (39オ)

し

〔絵八〕 (39ウ)

升六 雲隠もくかく

此巻よにふらさす大かた同前のことな
り光源氏と申せは雲かくれのよきたより
なり

升七 かほる大將共 にほふ兵部卿共

此巻かほるともにほふ兵部卿共云事は三
の宮と申てむらさきの上やしなひた
てまつりて梅さくらゆつり給ひしはあか

しの中宮の御はら源氏の御まこの宮

けんふくし給ひては兵部卿の宮と申御
かたちすくれて御心はなやかにうつく
しくおはしまし候なりかほる大將と
(40オ)

はかの女三の宮のわかみや人めは源氏の
御子まことにはかしは木の大納言のこそ

かし此君もけんふくなともけんしれい
せんみんに申をき給ひしにより冷泉院

にてせさせ給ふ源氏なに事も申を
かせ給ひしかはよのおほえかるからす

院にのみさふらひていとかたしけなく
おひたち給ひけるをつからかうはしく

てこの世のかほりならずあたり有 (40ウ)

かたければ三のみやうらやみ給ひてわ
さこのみて春はまかきの梅をかざし
御身にふれ夏は花たちはなをあつ
め香をなつかしみ秋はかれゆくふち
はかまをにほはす紅菊うきくまでもにほ
ひをあつめ給へはをのつから御にほひかう
はしくおはして人々にほふ兵部卿と
そ申ける此御かたそ源氏の御後には
たちつゝき人の心をもみたし給ひ
しされはほとけのかくれたまひし後 (41オ)
あなん尊しやかせうなどの世に出
給ひて二たひほとけとらいせしかこ
とくなりされは雲かくれにほふにもつ
くへしにほふと云事にはほひあつ
めしなと云事有へしかほるにはを
のつから

かほる匂ふなど

いふへし (41ウ)

〔絵九〕 (42オ)

竹川ならひ

此巻たけかはいふ事

竹かはのはしうち出し一ふしに

ふかき心のそこはしりきや 109

といふ哥の故なり此ひけるの大將

をは後におとゝとて関白もち給ひし

そかし玉かつらの御はらにわか君三

人姫君二ところおはします父うせ

給ひてさかりにいつくしくおはしけ

り其ころかほる大將いまた四位の侍従 (42ウ)

とておはせしころ此あね君を心かけ

かよひ給ひしなり此殿へおはして姫君

のおとゝこれもとう侍従とておさな

かりしとあそひて竹川うたひなど

してよみしなり又おなしころ夕

きりのおとゝ雲井のかりの御はらの御子

蔵人の少將といひしもこの姫君を心

かけてある夕くれにこの姫君たち

さくらをかけ物にて碁ごをうたせ給ひ

しを見ていとゝ心をつくしける竹 (43オ)

川に碁と云事此ころなるへしその

ことは

春の夕くれ 碁のかちまけ あねきみ
まけ給ふ

はなのかけ物 かいま見

などを付へしされとも此人くこのこ

ひもいたつら事にてひめ君れいせ

むゐんへまいりてわかみやなど出き
たまふ

いもうとの

君内へまいりて (43ウ)

わか宮など出き

給ふいもうとの

君内へまいりて母の

内侍のかみゆつりえて

内の内侍

のかみに

成給ふ

(44オ)

[絵十] (44ウ)

紅梅こうばい
ならひ

此巻こうはいと云事そのころ紅梅の
大納言と聞えしはかしは木の大納言
のおとゝそかし世のおほえいみしくな
に事も心はへありて時の人もてなし
奉り大臣になり給へはこうはいのおとゝ
とも此人を云なるへし北のかたはひけく

る大将のむすめかのひとりのはいか
けし人のはらそかし真木はしらのはな
れかたくせし姫君ほたる兵部卿の宮 (45オ)

の北のかたに成しを宮かくれ給ひ

て後御やとへおはしきに宮の御かたみ

にひめ君一ところおはします此御

かたのにはなへてならずおもしろ

きこうはいありこれを紅梅の御哥

と申なり扱こうはいと云なりまゝ

父大納言この梅のえたのおもしろき

をおりて御このわかきみまたわら

はてん上のほとなるを御つかひにてに (45ウ)

ほふ兵部卿のもとへくれなゐのうすやう

に文かきてたてまつり給ふ時の哥

こゝろありて風のにははすそのゝ梅に

まつうくひすのとはすやあるへき 110

と申されたりしなり宮いとけうあり

ておもひ給ひつねに御ふみなどありし

となりまことしき事もなく五十四帖

のほかにすもりとておほつかなきとこ

ろを清少納言かつくりいれたるといふこ

ともありその中にこうはい竹川とも

いへり又竹川をまついふ事もありお

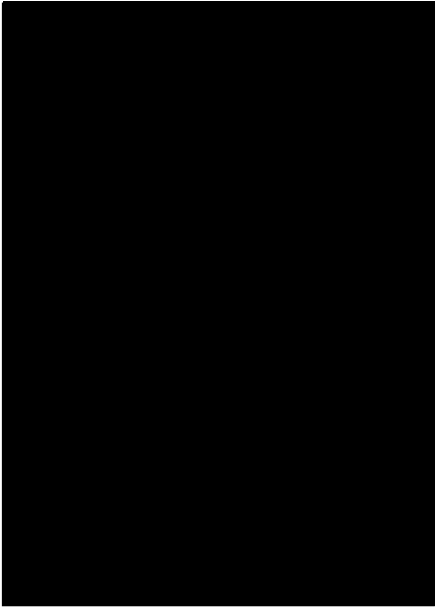
なし事なれば論すへから (46オ)

(46ウ)

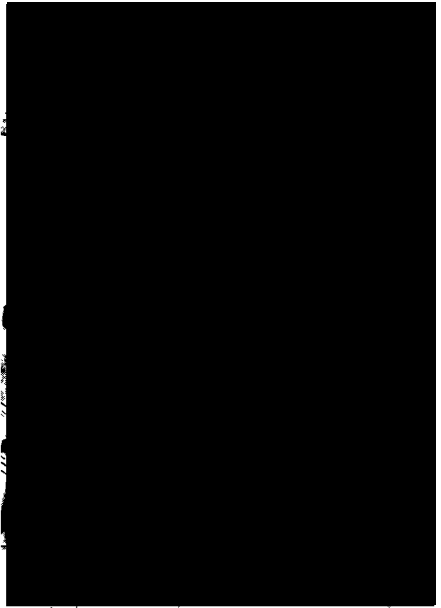
[絵十二] (47オ)

(遊び紙)

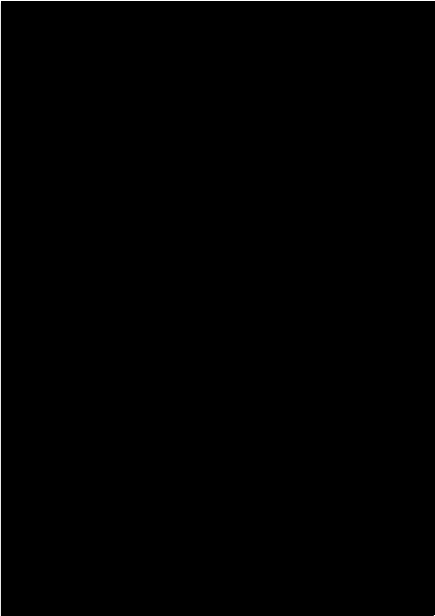
(本稿は平成19年度～21年度文部科学省科学研究費補助金
基盤研究(C)(課題番号一九五二〇一六三)による研究成果の
一部である。)



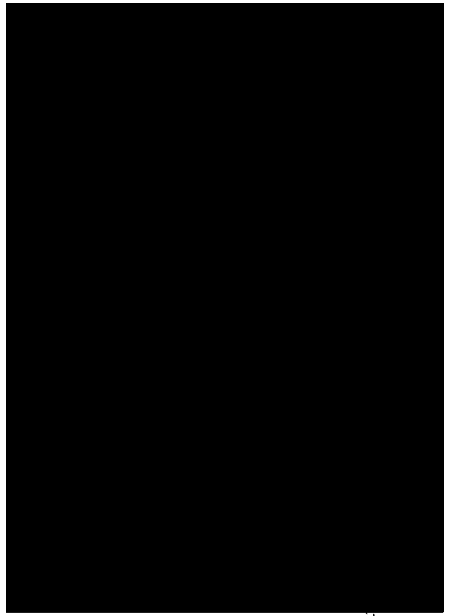
繪二



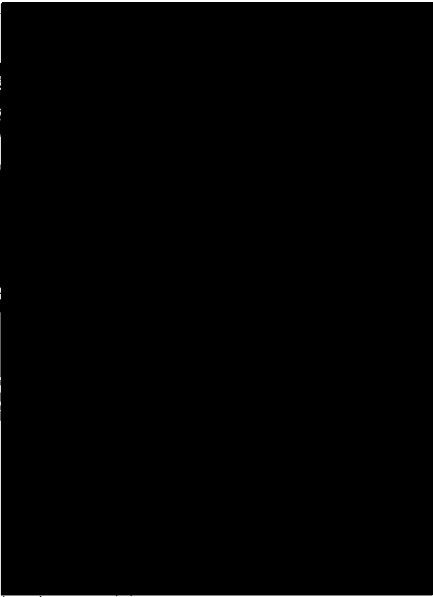
繪一



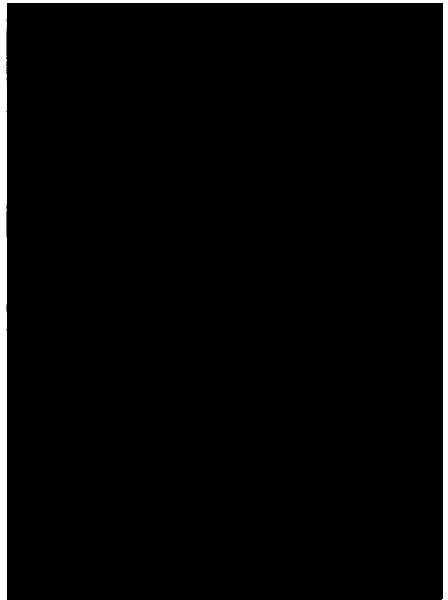
繪四



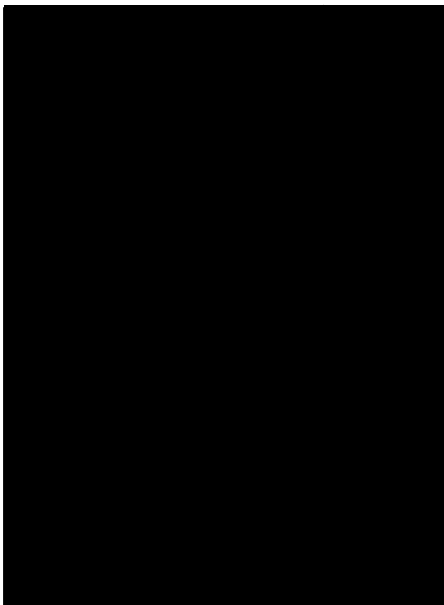
繪三



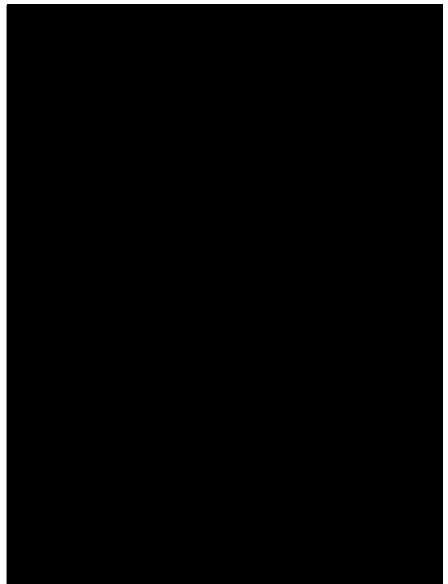
繪六



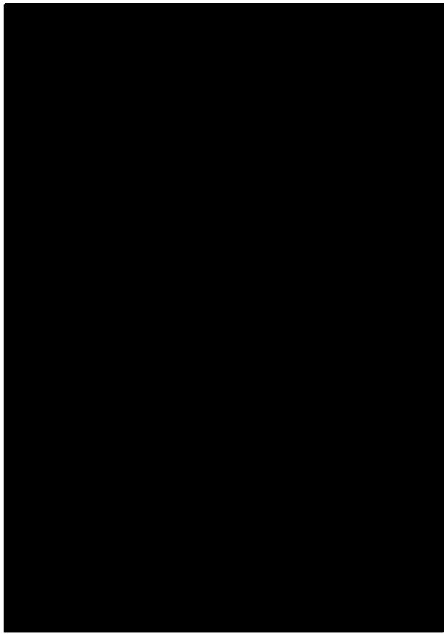
繪五



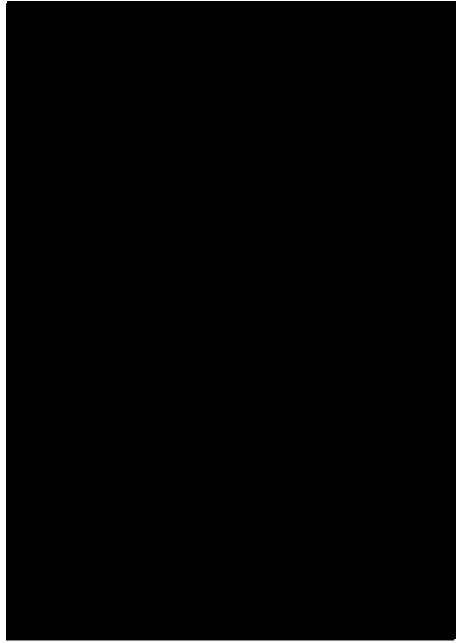
繪八



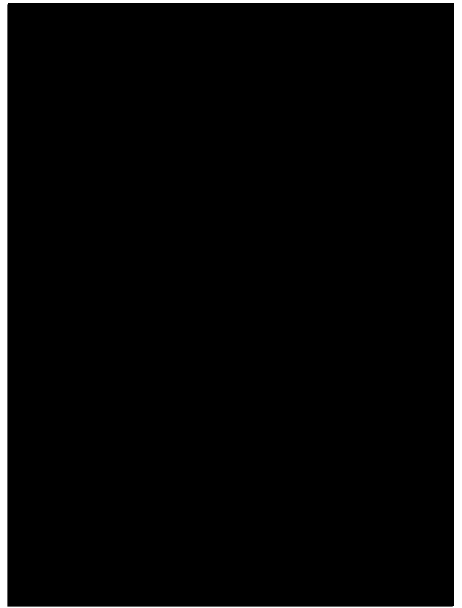
繪七



繪十



繪九



繪十一